聞名仏教

第 154 号　　毎月発行
（発行日）2023 年 7 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号 17810　番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

土下座に思う

佐々木蓮麿

聖徳太子は「驕りは悪の最大なるものなり」と言われましたが、これは、まことにうがったことばだと思います。

このことばを裏返してみますと、「土下座」は善の最大なるものであるということができるのではないでしょうか。

臼杵の辺ぴな海岸に佐志生という一漁村がありますが、かつてこの地におカツという女同行がおりまして、若い頃から熱心に仏法を聴聞して常に念仏を喜んでおりました。

いかなる場合でも、ほとんど悪い顔を見せることなく、いつもニコニコとして感謝の生活を営んでおったものですから、「おカツ婆さんが来ると周囲がホガラカになる」と言われておりました。つまり彼女の念仏が、そのフンイキをよくしたのでありましょう。伝教大師が「一隅を照らす」と言われたのは、こんな人のことではないでしょうか。

そこで、よく人は申しました。「おカツ婆さんはキリョウはよくないが、どことなしに愛らしくて親しみを感ずる云々」といかにもその通りでありました。

私が若い頃、佐志生部落に参りますと、おカツ婆さんは待ちこがれた様子で、遠くまで迎いに来るので、佐志生に法要があるときは少し早め目に参るようにしておったのであります。

そして、お説教が始まる前になると彼女は一人近所近辺をフレて歩き、一人でも多くの人に法を聞かせようとつとめるのが常でありました。

あるとき彼女の姪にあたるものが、三部経を二度読んでほしいと願ったところ、おカツ婆さんが姪をタシナメて言うには「お経はな！私のような悪人女人をお助け下さるありがたいおゆわれが説かれてあるのだからご院主さんに数多く読んでもらうよりも、ご院主さんからその御経のおこころをよく聞かしてもらって、自分自身の仕合わせをいただくことが何よりも大事じゃでの！、そんな無理な注文はやめて、一口でもお慈悲のお話をきかせてもらおうじゃないか」と言って、三部経を二度読むことをやめさせ、その代わりに家族が集まって法話を聞くことにしたのでありました。

私が彼の地に参って帰るときには必ず見送ってきて、道の峠までくると、大地に土下座して合掌し、私の姿が見えぬようになるまで、拝み通しておりました。

私は五十年後の今日なお彼女が土下座で拝跪している姿が思い出されて、おのずから頭が下がるのであります。

かつて多田鼎師が述懐して話されたことがありました。「私の祖母は非常に信仰が厚く毎年同行を伴い五十里の道を遠しとせず、三河から、京都の御本山に参ったものでありますが、大津から逢坂山を越えるとき、その峠から眼下に御本山が見えると、立ちどころに土下座し、御本山に向かって合掌礼拝したと聞いております。私は、この祖母の話を思い出すたびごとに、いつも自分の傲慢な頭を打ち叩かれるのであります云々」と。

まことに土下座のところにこそ、如来の光が輝いて下さるのではないでしょうか。

（了）

現代真宗問答⑱

B「真宗でよく『三願転入』といいますが、この意味は何ですか」

A「これは人が浄土の教を聞いて救われようとする道において、アミダ仏が第十八願の真実の救いに導き入れようとされる極めてご親切な筋道を示して下さったものだと、私は受け取っています」

B「アミダ仏は十八願だけ建てられたらいいのに、なぜ第十九願・第二十願を建てられたのですか」

A「それは、凡夫は自我への執着、自分の力への自己信頼が非常に強いので、十八願の救いが私たちにはたらいているにもかかわらず容易にそれをいただかないのですね。アミダ仏は十八願に帰せしめようとお手立てをして下さった、それが十九願であり二十願です。裏からいえば、この道をたどることによって自ずと十八願に至ることができるともいえましょう」

B「三願の中の十八願とは」

A「アミダ仏が〈念仏申すばかりで浄土に生まれしめる、その外に何もいらない〉、どうかこの誓いを信じて助かってくれよ〉との思し召しです。真宗の救いはこの第十八願の本願を信じて浄土に往生し仏に成る教えです。ですから助かるためには十八願のお心をよく聞き、お念仏を申すことです。これが真宗の聞法生活です」

B「私たちは自分の力で自分を救うことができるという、いわば自力執心が強いので、アミダ仏の救いを容易に受け入れないのですね」

A「ええ、だからいつまでたってもアミダ仏にあえないのです」

B「アミダ仏にであうことが救いなのに、アミダ仏にされていかないのですね」

A「ええそうです」

B「では第十九願とは」

A「『仏説無量寿経』の十九願の願文では、

たとい我、仏を得んに、十方衆生、菩提心を発し、もろもろの功徳を修して、心を至し願を発して我が国に生まれんと欲わん。寿終わる時に臨んで、たとい大衆と囲繞してその人の前に現ぜずんば、正覚を取らじ。

と説かれています。私たちは、アミダ仏のお助けにあおうとして自分の為す様々な善や行い加えて助かりにかかろうとします。このなかに当然お念仏も入っていますが」

B「お念仏を称えながらも、いろいろな善や行をして助かろうとすることですね。それは具体的にはどういう行いですか」

A「いろいろな先生のお話であえないのでいつまでも小さな自己（自我）に閉塞され、解放を聞いて、聞いたら分かると思って聞きつけていくことです。あるいは自分は罪悪感が乏しいからいつまでもダメなのだと思い、自分を詳しく反省したり内観したりして罪悪感を深めようとしたります。又、仏教書を沢山読んで理解して分かろうとしたり、あるいは宿善が薄いから本願が信じられないと思って布施行などの善を積んで助かるための功徳を積もうとしたりします。あるいは無常観が乏しいからいただけないと思って墓場にいって無常観を強めようとしたり、座談会に出てお叱りを受けて自分を否定して助かろうとすること等です」

B「そういうことはつまらぬことですか」

A「そうではありません。そのような善根を積んだり色々な行いをして助かろうとすることは無駄にはならないで、そういう者を十八願へ導こうとされるのがアミダ仏の十九願のお心です」

B「十九願に説かれた諸行諸善をなすことは無駄ではなくて十八願の救いへと導かれる縁にしてくださるのですね。なぜそれが第十八願に救われる縁になるのですか」

A「そういう努力によって自分の無知無能いわば自力の無効を知らされ、いよいよアミダ仏のお助けによるしか救いがないことを知るからです」

B「逆に云えば、それほど自分を信頼し、自分で自分を立てようとする自力執心が強いのですね。自己信頼とはどういうことと受け取ったらいいのでしょうか」

A「自己信頼の一番元に、自分の考え、いわば自分の知性を信頼していることがあります。聞いたら分かる、考えたら分かる、読んだら分かると、自分の頭、いわゆる分別を頼みにして分かろう助かろうとしていることです」

B「では教えを聞いて分かろうとすることはダメなのですか」

A「勿論、真宗の教を聞き

始めるときは聞いて分かりたい、知りたいが中心で、それでもって聞法するのであって、初めから分かることを否定するのではありません。よく聴き分け、よく考え、よく理解しようとすることは大事です。ただ自分の知性でアミダ仏を掴むとか、あるいは本願を信じることができるかというと、それが出来ないのです。教えを沢山聞き、よく理解できても、自分の知る力でアミダ仏に知ることができるかというと、それが不可能なのです。アミダ仏を対象的に知性で知ろうということは無量無辺のアミダ仏のはたらきを限定することになり、知性で分かったというのは無量なはたらきであるアミダ仏の影を掴んだにすぎません。知性で分かったことは無量なはたらきを極めて小さな尺度で限定しただけで、限定したものは無量ではありません、有限です。天上のお月さんを虫取り網でつかもうとするようなものです」

B「聞法を続けていくと、聞いても聞いても分からない、信じられないという壁にぶつかるのですね」

A「ええ、そうです。そうなるとそこで十八願のお助けにあう人もいます。十八願は〈そんなお前だから引き受ける、助ける〉というお心ですから、そのアミダ仏の大悲にふれることになります。しかしそれでもなお十八願のお心にあえないことが多いのです。そこにアミダ仏は第二十願を建ててくださっているのです」

B「第二十願とは」

A「無量寿経の願文に、

たとい我、仏を得んに、十方の衆生、我が名号を聞きて、念を我が国に係(か)けて、もろもろの徳本を植えて、心を至し回向して我が国に生まれんと欲わんに、果遂(つい)せずんば、正覚を取らじ。

とあります。これは名号一つを称えてくるものを遂には必ずアミダ仏の救いにあずからしめねばおかないというご親切な願です。いわゆるナムアミダブツを称えて助かろうと、念仏一つに望みをかけていく人を導いてアミダ仏の救いに至らしめようとされる願です」

B「念仏を称えて助かろうとする人というのはどのような人ですか」

A「聞いて助かろう、分かって助かろう、信じて助かろうと聞法に励んで助かろうという十九願の人が、やがてどうしても分からない、信じられない、疑いが晴れない、いわばどうにもならなくなってきます。すると十八願のお心が身近に感じられるようになります。こうして自分の聞法が行き詰まってくる中で、第十八願の〈我が名を称えるばかりで引き受ける〉という念仏往生の願を聞くと、〈称えるばかりで助けてくださる、ありがたいナムアミダブツ、ナムアミダブツ〉とお念仏を申す一つに道を見出すのです。そういう人のことです」

B「いわゆるもうお念仏一つしかない、となるのですね。〈ただ念仏しかない〉と言われるのをよく聞きます」

A「ええ、自分の限界が知られてきて〈残るのはお念仏より外はない〉などとよく聞きます。木村無相さんが

道がある　道がある
たった一つの道がある
極重悪人唯称仏

と詠っていますが、この念仏一つに入るのです」

B「これが二十願に入った姿なのですね。昔、藤原正遠師が、アミダ仏は〈どうにもならねば我が名を称えよ〉と仰せられている、とよくご法話でおっしゃっていました。まさにどうにもならなくなった私に〈どうにもならねば我が名を称えよ〉は有難いですね」

A「ええ、どこにも道がなくなった私に〈そのままなりで称えるばかりでよい、引き受ける〉のお心を聞いて、〈ああ私はもう称えるしかない。分からぬまま、信じられぬまま称えていくばかり、この外に道なし〉と受け取ってお念仏一つをたのみにする、これが二十願のすがたであり、アミダ仏の方からいうと、二十願によってアミダ仏のまことの救いに至らしめよう、導びこうとのアミダ仏のご親切な願が二十願です」

B「〈我が名を称えるばかりで引き受ける、その外に何もいらない〉は十八願ですが、この願を聞いていながら、十八願に入らずに二十願になっているというのはどういうことなのですか」

A「そこが微妙なところでよくよく聞かねばならないところです。十九願に留まっている人も二十願に留まっている人も、聞法の最初から第十八願は聞いているのです。ただ十九願の人は十八願を聞いていてもこれが私の救いだとそれほど痛切に感じていません。ところが二十願の人は十八願を聞いてこれしか救いはないと十九願よりは痛切に十八願を聞いているのですがなお十八願のお心が届いていないのです。〈我が名をとなえるばかりで助ける〉と聞いて、〈ああ、もう私は称えるばかり、この外に行きようはない、道は無い〉とま

では実感しています。けれども、なお十八願がアミダ仏のまる助けの願であり、とことん私を引き受けて下さる願であることが実感されていない。そこで〈称えるばかり〉〈念仏一つ〉と、お念仏にしがみつくのです。やはり私の側が主になっています。まだ自分の方に目がついている。称えていけば助かるという魂胆があります。称えて行けばいつかは助かるという計算があります。どこまでも今まるまる引き受けて下さっているお心が分からないのです」

B「そうすると十八願をほんとうにいただくというのはどういうことですか」

A「念仏一つとなって念仏を称えるのですが、自分をたのむ計らいの心がなお残っており、アミダ仏にあえないのです。ところが二十願には〈果遂せずんば、正覚を取らじ〉というアミダ仏の願力がはたらいて下さるのでありましょう、とうとう称えてもダメ、聞いてもダメ、疑いばかりの不信の助からぬ我が身と知らされるのです」

B「アミダ仏の果遂の願力がはたらいて、自分は本当に助からぬ身と知らされるのですね。ということは自分の力では私の救われ難き身は知れないのですね」

A「ええ、そう思います。この救いなき身と知らされるところに、自ずから〈ソノママナリデ助ける〉〈称えるばかりで助ける〉の仰せが大慈大悲のお心だと身に沁みて思い知らされるのです」

B「称える私に重心が懸かっていたのが、全面的にアミダ仏の大慈大悲によって救われることに気がつくのですね」

A「ええそうです。もはや私の称えることさえ用事がなくなって、今このままなりの私をアミダ仏は全面的に担ってくださっていた、引き受けて下さっていた、そのお心が〈我が名を称えよ〉のお心だったと知られるのです。アミダ様ばっかりと、アミダ仏のお心ばかりに目がつくのです。アミダ仏の仰せにびっくりするだけ、聞くだけ、仰せぎりで、もう何も言うことがなくなります。木村さんが最晩年に、

生き死にの
道はただただナムアミダ
ただ称えよの
仰せばかりぞ

と詠われたのがこれです。ここにアミダ仏との出あいがあり、摂取不捨の利益にあずかるのです。これが十八願のお助けです」

B「聞法者が皆このプロセスを通るのですか」

A「いいえ、十八願の救いは万人にすでにはたらきかけておられるのであり、いつでもだれでも今すぐに十八願をいただけるようになっています。ですからこのプロセスを経ずに十八願に入る人が当然います」

B「ではなぜ三願転入のプロセスが説かれたのですか」

A「それは先ほども申しましたように、凡夫は自力の執心がとても強いので容易に十八願を受け入れないのです。そこでアミダ仏は十八願に入るプロセスとして十九願・二十願のお手立てでもって十八願に入れようとされるのです。実に行き届いた大悲のご方便です」

B「この三願転入によって、十八願のいわれを聞いていく中で十九願・二十願の道をたどり自ずから十八願に転入させて下さるのですね」

A「ええ。ただこういうお話をすると、それは自力的な道であり、そんな手間暇（てまひま）はいらないといわれるお方が当然ありましょう。それは十分承知の上でお話ししているのです。ただ親鸞聖人が三願転入を〈化身土巻〉に説かれたのは、やはり十八願は難信の法である、それゆえご自身の求法過程を三願転入として知らせて下さることによって、私たちに十八願に至る道を示されたのは大いなるご親切であると思います。これによって聞法している人がどこに間違いがあるか、どこに救われる道があるかが知られるからです」

（了）

【住職雑感】 5月末に前立腺癌の検査（生検）を受けました。4日間の検査で、生検を受ける前に、尿・血液・心電図・レントゲン・MRIなどの検査があり、癌が転移していないか、また生検に耐えられかなどを調べます。生検は部位にレーザーの針で10回ほど刺して組織を取りますので出血します。生検そのものは痛みがありませんでした。検査の医師が「大阪で一番楽なのがうちの病院です」と言われましたがその通りでした。ただ出血が多量で退院が一日延びました。検査結果は「癌ではない」とのことでした。

4月の血液検査で、PSAの値が10以上になり、他の検査も陽性の可能性ありと出たので、かかりつけのお医者さんが「癌の可能性が高い。生検を必ず受けなさい」と強く言われ、検査をした次第です。そんなことで、まだしばらくは娑婆におれそうですが、これだけはわかりません。毎日が無常の世です。以前、癌を怖れて菜食に切り替え、一切肉を食べない生活をしていた人が交通事故で亡くなったという話を聞きました。どれほど健康に気をつけていても、死の縁は無量であり死は必然です。いつでも死の縁がくることを忘れず、アミダの大悲をたえず聞きながら生きたいものです。